

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380841

研究課題名(和文)「場所」の魅力の解明 - 場所経験が人生移行に与える影響

研究課題名(英文) Attractions of place - How do place experiences contribute to human psychological development?

研究代表者

岡本 卓也 (OKAMOTO, Takuya)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：30441174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は「場所」の持つ魅力の仕組みと、「場所」経験に伴う心理的变化を明らかにする事であった。上記の目的を達成するため、(1)山行者動機と達成感調査、(2)環境志向性と定住・観光意図に関する調査、(3)コミュニティにおける居場所と定住意図に関するWeb調査、(4)旅行者と居住者の観光地評価に関するWeb調査、(5)観光地の再訪性に関するWeb調査を実施した。これらの調査の結果、住み心地が良く住み続けたいと感じる「場所」や、旅人が訪れたい、滞在し続けたいと思う「場所」について検討を行った。また、場所に対する評価形成において、属性の違いによる媒介される心理的機能が異なることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to clarify the mechanism of the attractiveness of “place” and the psychological development that is affected by the “place” experience.

The following five investigations were conducted: (1) a survey about hiking motivations and psychological accomplishments, (2) a web survey about environmental orientation of domicile residence and tourists, (3) a web survey about “third place” and intentions to stay in a community, (4) a survey about the psychological mechanisms behind evaluating places, and (5) a survey about the psychological mechanisms of repeat travel to the same destinations. As a result of these surveys, we clarified that psychological factors are important in evaluating places.

研究分野：社会心理学

キーワード：場所の魅力 Place Identity 環境志向性 観光動機 登山動機 人生移行 定住意図 聖地巡礼

1. 研究開始当初の背景

「場所」に関する研究は、古典的には哲学や人文地理学(Tuan, 1974)といった思弁的な研究や、都市工学(Lynch, 1968)などのように、人の心理過程を看過した研究が行われてきた。近年では、観光(心理)学による旅行者を調査対象者とした研究や、居住者のみを対象としたコミュニティ研究などがあるが、いずれも限定的な立場からの研究だったといえる。旅行者と居住者では、同じ「場所」であっても異なる側面へ惹かれ、異なった意味や価値を見出すだろう。いわゆる「場所」のアフォードンス(誘因; Gibson, 1977)は、対象者によってその意味は異なる。双方の「場所」の価値を発掘し、相互に確認することは「場所」という資源を余すことなく活用することに繋がるだろう。

また、場所と人の関わりについては、巡礼が自己過程に与える影響(藤原, 2001)や社会現象としての移動に関する研究も行われている(石黒, 2012)。しかし、どのような「場所」に定住/移動することが、自己の発達や人生移行にどのような影響を与えているのかについて体系的な議論はなされていない。

「場所」には、歴史的背景、景観の要素や空間利用、人的交流などが含まれる。これらを踏まえた上で、「場所」を中心に据えおき、それと人がどう関わっているのか、また、「場所」の経験が、人生移行においてどのような意味を持つのかについて統合的な議論をすべきといえる。

2. 研究の目的

本課題では調査対象地を観光地とし、「場所」の魅力明らかにするが、いずれは観光地以外の「場所」も調査対象とする。具体的には下記の3点を明らかにする。

(1) 居住者・旅行者は「場所」に何を求め、「場所」は人に何をアフォードするのか：人は何らかのモチベーションや期待があり、ある「場所」に定住したり、旅先として選択したりする(Push)。居住者と旅行者では、その関わり方や期待が異なりながらも同じ「場所」にいる。両者はどのようなモチベーションを持ち、「場所」に何を求め、定住や移住(滞在や訪問)をするのだろうか。その類似点と相違点を明らかにする。また人はあるモチベーションから「場所」を訪ねたり居住したりするだけでなく、「場所」によってアフォード(Pull)されているといえる。Gibson(1977)によればアフォードンスとは、環境が動物に対して与える「意味」のことであり、ある「場所」は旅人に訪問地(通過点)として魅力(抵抗感)を感じさせ、同じ「場所」は、居住者に対しては居心地の良さ(悪さ)を感じさせる。ある「場所」固有の誘因性を明らかにする。

(2) Place Identity と記憶に残る「場所」：自己と「場所」の結びつきに関する重要な概念として Place Identity (Altman & Low, 1992

以下 PI) がある。PI とは、個人と場所との情緒的な絆のことであり、知識や信念に関わる態度の認知的成分と、活動や行動意図に関する態度の行動的成分から成るとされているが、これを定量的に扱った研究は少ない。PI がどのような要因によって増減するのか、PI の高低が生活満足・人生移行に与える影響について明らかにする。また、PI は今現在の「場所」に対する結びつきであるが、一方で人には思い出の「場所」というものがある。それらは自己の発達において重要な意味を持ち、後年になって想起され快感情を生起させることが多い。「場所」の記憶と感情の関連についても明らかにする。

(3) 「場所」経験と人生移行：移住や旅行によって「場所」を経験することは、人生において大きな意味を持つ。いわゆる転地効果や長期旅行者の自己拡大(林・藤原, 2008)、アイデンティティ形成と居場所の問題(則定, 2008)など「場所」が変わることの心理的效果や、成長に与える影響は大きく、ライフステージの違いによる「場所」経験への意味付けも重要である。定住や訪問によって人は「場所」から何を求めるのだろうか。「場所」経験が人生移行に与える影響を解明する。

3. 研究の方法

(1) **山行者動機と達成感に関する調査**：湊沢カール(N=107)および横尾山荘・燕山荘において(N=110)、利用者に対する面接調査および質問紙調査を行った。

(2) **環境志向性と定住・観光意図に関する Web 調査(2015 年度)**：Web 調査会社の登録会員を対象に 20 代から 60 代の男女 50 名ずつを割当て、Satisfice 確認項目に正答した合計 500 名を対象に調査を行った。

(3) **コミュニティにおける居場所と定住意図に関する Web 調査(2016・2017 年度)**：Web 調査会社の登録会員を対象に 20 代から 60 代の男女 50 名ずつを割当て、Satisfice 確認項目に正答した合計 500 名を対象に調査を行った。

(4) **旅行者と居住者の観光地評価に関する調査**：観光都市に在住する市民と、観光を目的に訪れた観光客が同じ都市をどのように評価するのかを明らかにするため、PEN-A (Photo Elicitation Narrative-Approach)を用いて調査を行った(N=21)。

(5) **観光地の再訪性に関する Web 調査(2017 年度)**：Web 調査会社の登録会員を対象に 20 代から 60 代の男女 50 名ずつを割当て、Satisfice 確認項目に正答した合計 500 名を対象に調査を行った。

4. 研究成果

(1) 山行者動機と達成感に関する調査

山登りに関する自由記述の内容を、世代との対応分析を行った結果が figure1 である。図からは、20代から40代の若い世代にとっての登山は、「リフレッシュ」「リラックス」「解消」「現実」「修行」「見つめる」等の語句と布置が近く、ストレスの解消や日常生活からの逃避や、自己研鑽の場として捉えていることが分かる。40代から50代では、「生きがい」「景色」「生活」「趣味」「体力」といった語句と布置が近く、趣味としての山登りによって生活を充実させることや体力増強として登山を捉えているようだ。60代以降では、「楽しみ」「充実」「健康」「挑戦」「自信」「感動」といった語句との布置が近く、健康維持や挑戦することでの自信獲得の場として登山を捉えているようだ。このような傾向は、自己決定理論(Deci & Ryan, 1985)に基づき、登山動機について分析した岡本・藤原(2015)の研究結果と一致している。世代や動機の違いによる山登りの意味付けは、Erikson, (1959)の Psychological crisis への対峙場面とも対応していると言える

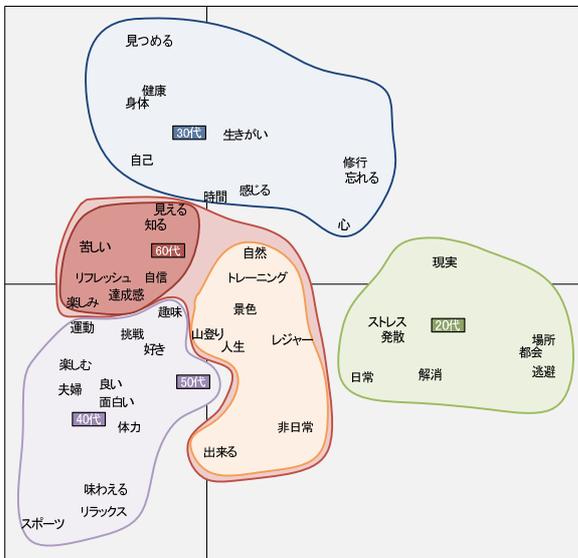


Figure1. 世代と登山の意味の対応分析の結果

(2) 環境志向性と定住・観光意図に関する Web 調査

環境志向性尺度の作成および、その違いが定住環境や観光地評価に与える影響を検討するために調査を行った。2度の予備調査によって作成された環境志向性尺度(案)の項目に対して、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、因子負荷量が.40未満であった項目、および複数の因子に.30以上負荷している項目を削除した結果、39項目9因子が抽出された($\chi^2(426) = 742.29, p < .001, CFI = .96, RMSE = .04$)。具体的には、都市的な機能や整然とした見た目を志向する「都市機能志向」、過去に親しんだり自分になじみ深かったりする環境を志向する「過去経験志向」、新たな人間関係の構築を志向する「出

会い志向」、その土地独自の風土の保存を志向する「地域風土志向」、自然豊かな場所を志向する「自然環境志向」、既存の人間関係を維持することができる環境を志向する「友人関係志向」、歴史的価値のある場所を志向する「歴史遺産志向」、刺激や変化を享受することができる環境を志向する「変化刺激志向」、家族のそばにすることができる環境を志向する「家族関係志向」の9因子である。

また、作成した環境志向性尺度の妥当性を確認するため、大学生を対象に、自分の好きな場所の写真と尺度得点の関係について調査、分析を行った。その結果、尺度の妥当性が確認された。

また、「出会い志向」と観光先の現地の人々と交流を持ちたいとする「現地交流」、および、自己の成長や人生観の変化を求める「自己拡大」にそれぞれ中程度の正の相関が認められた。また、自然豊かな環境を志向する「自然志向」と観光先で自然を身近に感じたいとする「自然体感」に中程度の正の相関、歴史的価値のある場所に魅力を感じる「歴史志向」と、観光先で遺跡を巡り歴史について学びたいとする「文化見聞」に強い正の相関、周囲の環境に対して刺激や変化を求める「刺激志向」と、「自己拡大」に中程度の正の相関、および、はっきりとした計画を立てずに観光をしたいという「意外性」に中程度の正の相関が認められた。

(3) コミュニティにおける居場所と定住意図に関する Web 調査

地域との繋がりを意味する Place Identity の効果を検討するため、Place Identity と定住意図・居住地満足に関する調査を行った。

Figure2 は、「地域とのつながりを意識する状況や場面」という問いに対する自由回答の内容を、コレスポネンス分析によって分析を行った結果である。

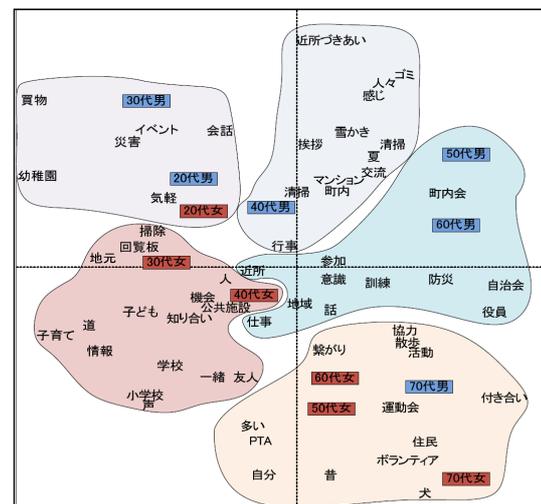


Figure2. 世代と Place Identity の対応分析

20代女性・20~30代男性は同じカテゴリーに分類され、買い物、幼稚園、イベント、気軽、会話などとの関連が強い事が分かる。す

なわち、幼稚園を通したイベントや、買い物時などに気軽に会話が始まることで、地域との繋がりを感ずるようである。

30~40代女性は、子ども、学校、公共施設、子育てといった語句との関連が強い。この年齢の女性が小中学生の子どもを中心とし、人間関係を形成し、地域との繋がりを持っていることが読み取れる。どちらかと言えば受け身の形で交流をしている様子も読み取れるだろう。

40代男性は、除外した「つながりがない」の頻度をもっとも多い層である。その中でも繋がりを感ずたのは、普段の挨拶や、マンションでの交流など、日常的な生活の中での些細な関わりから繋がりを感ずているようである。また、雪かきや行事、清掃など、肉体労働を伴うようなイベントにおいても繋がりを感ずていることが分かる。

50~60代男性は、町内会、自治会、役員、防災との関連が強い。すなわち、町の中での自治組織での活動が地域との繋がりを感ずることになる。これらの層も「つながりがない」と回答する者が多かったことを考えると、こういった自治組織と関わりを持たない中年以降の男性は、地域との繋がりを感ずられないことが考えられる。

50代以上の女性及び70代男性は、運動会、散歩、ボランティア、昔、などとの関連が強い。日々の散歩の中での交流や、ボランティア活動、あるいは地区の運動会などのイベントや昔ながらの付き合いなどによって地域との繋がりを感ずているようである。

また、コミュニティにおけるサードプレイス利用が、居住継続意図や生活満足に与える影響を検討することを目的に、Web調査を実施した。Table1は居場所所有無タイプ別に、生活満足度、居住継続意図を従属変数に重回帰分析を行った結果である。居場所が無く、TPを利用している者が少なかったため、居場所(家)型と居場所無し型を一つのカテゴリに纏めている。居場所がある者は、TPの利用動機やTP利用時に得られるポジティブな感情経験が、従属変数に与える影響が小さいのに対して、居場所無し型の者は、これらの影響が相対的に大きい。ファーストプレイス、セカンドプレイスへの意味づけを媒介として生活満足度を高めることなどが確認された。

Table1. 居場所所有無タイプ別重回帰分析の結果

	生活満足度		居住継続意図	
	(a)居場所	(b+c)居場所	(a)居場所	(b+c)居場所
	有り型	無し型	有り型	無し型
交流動機	.075	-.098	-.007	.004
没入動機	-.028	-.122	.016	-.126
くつろぎ動機	.205 *	.255 +	.088	-.118
物理的動機	.043	-.218	.122	-.053
存在承認動機	-.109	.078	-.024	.275 +
アクセス動機	.058	.146	.058	.149
集中	-.057	-.261 +	-.126	-.030
活動的快	.202 +	.280 +	.096	.209
非活動的快	-.037	.280 +	-.032	.248
TP利用時間	-.117	-.164	-.159 *	-.352 *
TP利用頻度	.008	.149	.060	-.010
R^2	.090 +	.308 *	.066	.328 *
Adjust R^2	.038	.155	.012	.180

(5) 旅行者と居住者の観光地評価に関する調査：

旅行者と居住者による、同じ場所に対する評価の違いを検討するため、長野県松本市において、居住者と旅行者を対象にPEN-Aによる調査を行った。調査の結果、まちの魅力について、撮影対象と撮影理由に違いが見られた。例えば、居住者の撮影対象で多い者は「自然環境」「旅行者インフラ」であり、訪問者の撮影対象で多い者は「文化歴史芸術」「人」「一般インフラ」であった。また、それぞれの撮影理由としては、居住者が「他者の影響」「伝統・趣」「日常性」「季節感」「リフレッシュ」「他の地域との比較」「松本らしさ」「可能性」を多くあげのに対して、訪問者は「綺麗さ・可愛さ」「個人的好み」「作品の舞台」「写真映え」「面白さ」「雰囲気」「興奮」「新鮮さ」「目を引く対象」「記録」を多くあげていた。これらの違いについて、Placeness(Urry,1995)という概念をキーに、物理的な意味での場所の捉え方と、その場所に対する意味づけのズレについて論考した。

(6) 観光地の再訪性に関する Web 調査：

Table2は、タイプ別の、その観光地を再訪した回数、初回旅行時の機能的評価、情緒的評価の平均値および分散分析の結果である。再現型タイプは、初回旅行時にリラックス感情(ポジ・不活性)を強く感じ、健康回復評価が高く、知識獲得が低いことなどが示された。また、印象深かった観光旅行についての思い出についての自由記述の内容を、KH Coder(樋口, 2014)によって処理を行い、再訪タイプとの対応分析を行った結果、初訪時に、展開型リピーターは、ネガティブな感情や体験、現地の人との関わりなどの経験が、再現型リピーターは、リラックス感情や宿泊施設での良い経験が再訪に結びついていると言える。

Table2. リピートタイプ別の1回目観光行動評価

リピート回数	機能的評価				情緒的経験			
	自己拡大	関係強化	知識獲得	健康回復	ポジ・不活性	ポジ・興奮	ネガ・不活	ネガ・興奮
展開型	3.47	3.20	3.57	3.59	3.74	3.77	3.62	1.78
再現型	3.89	3.09	3.56	3.33	3.96	4.01	3.55	1.64
リピタイプ主効果	**		$F(1,311)=.60$				$F(1,311)=.60$	
評価主効果	/		$F(3,933)=2.41^+$				$F(3,933)=660.12^{**}$	
交互作用	/		$F(3,933)=2.23^+$				$F(3,933)=4.16^{**}$	

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

1. 加藤潤三 (2018). 地域コミュニティに対する住民の価値観の構造. 人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要), 第 38 号, p93-111. (査読無)
2. 加藤潤三・前村奈央佳 (2018). 沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討: 「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて 移民研究, 第 14 号, p.1-20. (査読あり)
3. 前村奈央佳・加藤潤三 (2018). 沖縄県系人の価値観に関する研究: 北米・中南米・沖縄による地域間・世代間比較. 移民研究, 第 14 号, p.21-34. (査読あり)
4. 石盛真徳・岡本卓也 (2017). 行政職員のボランティア参加経験が彼らのボランティア活動や協働事業への積極性に与える影響の検討. コミュニティ心理学研究, 21, 61-79. (査読あり)
5. 岡本卓也 (2017). SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス. 信州大学人文科学論集, 4, 113-133
6. 岡本卓也・藤原武弘 (2015). 登山行動に関する社会心理学的研究: 登山動機の構造とその変遷. 関西学院大学社会学部紀要, (120), 167-180. (査読無)
7. 林幸史・藤原武弘 (2015). 旅行者が交差する場としてのゲストハウス: 交流型ツーリズムの社会心理学的研究. 関西学院大学社会学部紀要, (120), 79-87. (査読無)
8. 加藤潤三・林幸史・前村奈央佳, 岡本卓也・藤原武弘 (2015). 多方向的評価法による地域資源の開発: ウチとソトからみた沖縄の魅力. 関西学院大学社会学部紀要, (120), 103-113. (査読無)
9. 前村奈央佳, 加藤潤三・藤原武弘 (2015). 移動を希求する心理: 『ライフスタイル移民』についての社会心理学的考察. 関西学院大学社会学部紀要, (120), 133-146. (査読無)
10. 岡本卓也 (2014). 観光動機の違いが観光情報収集と訪問地選択に与える影響~長野県松本市・安曇野市における観光者動向からの検討~. 地域ブランド研究, (9), 31-42. (査読あり)
11. 岡本卓也・林幸史・藤原武弘 (2014). 写真投影法による子どもの危険認知の把握. コミュニティ心理学研究, 18(1), 21-41. (査読あり)
12. 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三 (2014). 写真による高齢者の地域生活把握の試み: 写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach) による写真とナラティブの内容分析を中心として. コミュニティ心理学研究, 18(1), 42-57. (査

読あり)

13. 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三 (2014). 写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach) による中高年の地域コミュニティへの意識と地域における活動の把握: 京都市中京区西ノ京・壬生地域における調査. 追手門経営論集, 20(2), 1-43. (査読あり)
14. 林幸史 (2014). 観光地の魅力測定の試み: 新しい調査手法としての観光写真調査法. コミュニティ心理学研究, 18(1), 76-92. (査読あり)
15. 加藤潤三・前村奈央佳 (2014). 沖縄の県外移住者の適応におけるソーシャルキャピタルの影響. 人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要), 31, 111-143. (査読無)

〔学会発表〕(計 67 件)

1. 岡本卓也 (2017). 登山動機と登山の意味. 第 58 回日本社会心理学会.
2. 岡本卓也 (2017). 環境志向性尺度の作成. 日本心理学会第 81 回大会.
3. OKAMOTO, T. (2017). Hiking motivations and emotions on the mountain top. The Asian Association of Social Psychology 2017 Conference.
4. OKAMOTO, T. (2017). Place identity and environmental orientation. The 15th European Congress of Psychology.
5. 岡本卓也 (2017). 環境志向性と利用動機がサードプレイス利用時の感情状態に与える影響. 第 20 回日本コミュニティ心理学会.
6. 岡本卓也 (2016). 社会的支配志向性および集団自尊心が差別的態度に与える影響. 第 57 回日本社会心理学会, 253.
7. OKAMOTO, T. (2016). Tourists' motivation and memories of positive or negative experiences. 31st International Congress of Psychology.
8. Sekimori, M., OKAMOTO, T., & Hasegawa, K. (2016). Construction of two dimensional sense of self scale. 31st International Congress of Psychology.
9. Kira, Y., OKAMOTO, T., & Ogata, A. (2016). The effect of peer group similarity on individual relationship satisfaction with one's peer group. 31st International Congress of Psychology.
10. 加藤潤三・石盛真徳・岡本卓也・近藤芳樹 (2015). 首都圏における地域コミュニティの現状の統合的な理解に向けて (1)—コミュニティカルテ作成の試み—日本社会心理学会第 56 回大会.
11. 石盛真徳・岡本卓也・近藤芳樹・加藤潤三 (2015). 首都圏における地域コミュニティの現状の統合的な理解に向けて (2)—環境配慮行動に注目して—日本社会心理学会第 56 回大会.

12. 岡本卓也・石盛真徳・加藤潤三・近藤芳樹 (2015). 首都圏における地域コミュニティの現状の統合的な理解に向けて(3)—地域との繋がりを感じる時—日本社会心理学会第 56 回大会.
13. 近藤芳樹・谷沢仁美・稲垣勝之・加藤潤三・石盛真徳・岡本卓也(2015).首都圏における地域コミュニティの現状の統合的な理解に向けて(4)—一定注意図に与える影響—日本社会心理学会第 56 回大会.
14. 岡本卓也・吉村保奈美(2015). SNS ストレス尺度の作成と精神的健康への影響の検討. 日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会.
15. 岡本卓也 (2015). 世代による登山行動の意味付けの違い. 日本心理学会第 79 回大会.
16. 石盛真徳・岡本卓也 (2015). マラソンボランティアへの参加が地域活動への意識に及ぼす影響について(1). 日本コミュニティ心理学会第 18 回大会.
17. 岡本卓也・石盛真徳 (2015). マラソンボランティアへの参加が地域活動への意識に及ぼす影響について(2). 日本コミュニティ心理学会第 18 回大会.
18. OKAMOTO, T., (2015). Awareness of water rights and of the need for groundwater protection. The 14th European Congress of Psychology.
19. ISHIMORI, M., OKAMOTO, T., & KATO, J., (2015). Community values in the Tokyo metropolitan area. The 14th European Congress of Psychology.
20. 岡本卓也 (2015). 集団への愛着, 所属意識をどのように捉えるのか. 第 11 回群馬大学社会心理学研究小集会.
21. 岡本卓也 (2014). 観光の事前情報の収集は, 訪問先の意味決定にどのように関与するか. 北海道心理学会第 61 回大会シンポジウム 観光行動を読む - 心理学で考える観光まちづくり -
22. 岡本卓也・佐藤広英 (2014). 観光動機と訪問先の意味決定過程の関係. 日本心理学会第 78 回大会.
23. 岡本卓也・石盛真徳・加藤潤三・近藤芳樹 (2014). 横浜市磯子区におけるコミュニティ意識に関する調査(2)—居住の契機と Place Identity の関係—日本社会心理学会第 55 回大会, 251.
24. 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三・近藤芳樹 (2014). 横浜市磯子区におけるコミュニティ意識に関する調査(1)—日本社会心理学会第 55 回大会.
25. 岡本卓也 (2014). 水利権認知の違いによる地下水保全に対する意識. 日本グループ・ダイナミクス第 61 回大会.
26. KAMATA, M., KOSUGI, K., & OKAMOTO, T. (2014). Scaling for individual relations and visualizing small group process (2). 28th International

Congress of Applied Psychology.

27. KOSUGI, K., KAMATA, M., & OKAMOTO, T. (2014). Scaling for individual relations and visualizing small group process (1). 28th International Congress of Applied Psychology.

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 卓也 (OKAMOTO, Takuya)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 3 0 4 4 1 1 7 4

(2) 研究分担者

林 幸史 (HAYASHI, Yoshifumi)
大阪国際大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 1 0 5 6 7 6 2 1

加藤 潤三 (KATO, Junzo)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号: 3 0 3 8 8 6 4 9

石盛 真徳 (ISHIMORI, Masanori)
追手門学院大学・経営学部・准教授
研究者番号: 7 0 3 4 0 4 5 3

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

()